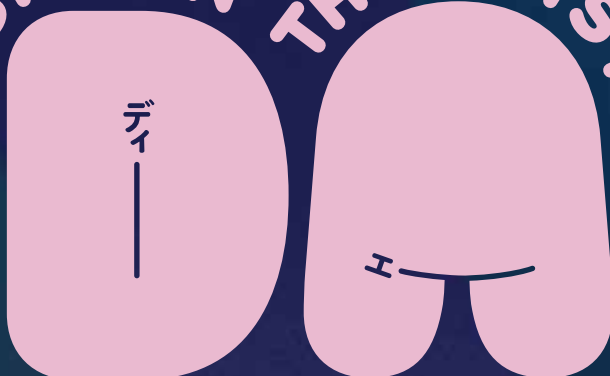


TAKE FREE

Vol.

15

DIVERSITY IN THE ARTS PAPER



特集

おはなし

聞く、語る、語りなおすこと

特集

おはなし 聞く、語る、語りなおすこと

目の前の一個の人間が自分には計り知れない存在である、という事実に行き当たるときに生じる「恐れ」は、その人の果てしなさと出会う「よろこび」と常に一対です。「聞く」ことを通じて、自分自身をつくりかえていく旅。

——小野和子『あいたくてきたくて旅にでる』（PUMPUKES、2019年）
p.351 濱口竜介「聞くことが声をつくる」

民話採訪者として東北各地をめぐる小野和子さんの著書に、映画監督の濱口竜介さんがテキストを寄せている。そこでは「聞く」ことは、古い自分を打ち捨てて変革することだと記されている。「聞く」行為は、それに対する自身の反応に直面することと切り離すことができないのだ。小野さんの言葉を借りるなら「語り手に見合う自分をつくり出さなくちゃいけない」。

今号の特集は「おはなし 聞く、語る、語りなおすこと」。私たちを取り巻く社会、さまざまなコミュニティにおいて、これまで近くにあったにもかかわらず無いものとされてきた声、問われるまで本人さえも気づかなかった背景や見方、声を上げることすら抑圧されてきた語り。それらと、「聞く」ことを通じて向き合い、ともに語りなおす術を探るために。各地の実践者と出会い、その語りを聞くことから始めてみたい。



DIVERSITY IN THE ARTS PAPER Vol.15

特集

おはなし

聞く、語る、語りなおすこと



REPORT

4-9

子どもたちの困難を
生きるためのおはなしに変える

イタリア・ミラノの絵本出版社、カルトゥージアの実践
文=末澤寧史 協力・写真提供=どく社 取材協力=多木陽介



INSIGHT

10-11

ともに語りなおすための術



REPORT

12-17

ともに笑い、怒り、語るために
「わたしの幻聴幻覚」プロジェクト

写真=善家宏明



COLUMN

18

私たちは全然違うけれど、少しずつ
似ているし、変わることができる

文=飯山由貴

連載

19-26 Cultivating The Arts “生きるための技術”をさがして
第2回 北海道

今号の案内人：大友恵理

紹介作家：田湯加那子、ハンディキャップシアター Show Time、高丸誠

文=末澤寧史 写真=澤木亮平

27-31 DA COLUMN PARK

ささやかで大切な闘争の備忘録 ～イタリア・ミラノから～ 和田夏実

〇〇ははじめました『『ひょん』なことから』 丹正和臣

きまぐれ介護日記 田中みゆき

『フジヤマコトントン』ができるまで ～後編～ 青柳拓、山野目光政、辻井潔

福祉の現場の文字採集 「福井さんの歯医者さんの予定」 今号の採集者：伊奈真弓

RADIO インクルホイ！ 「私らしさと向き合う」 浅野翔+山田小百合

32 編集後記 漫画=makomo



カルトゥージア出版が手がけてきた絵本。社会的なメッセージが込められている

絵本が取り上げるのは、どれも気軽に話せるようなテーマではなく、当事者にとってデリケートな問題だ。生きづらさを抱える子どもたちが、生

う命名されている。数あるシリーズのなかで、「カルトゥージアを体現する」とパトリツィアさんが自負するのが、「しかくいおはなし」のシリーズ。このシリーズは、判型が正方形で統一されていることから、その

情も刺激されていくの。本は、触って、匂いを嗅いで、のぞき込んで、受け止めるもの。フィジカルな感覚から、思考も感情も刺激されていくの。切なツール。子どもは絵本を通して、身のまわりのことを学び、世界について学んでいきます。絵本は、触って、匂いを嗅いで、のぞき込んで、受け止めるもの。フィジカルな感覚から、思考も感情も刺激されていくの。

「ケアする」ための絵本

カルトゥージア出版の創業は1987年。これまでに、幼児向けから青少年向けまで、幅広いジャンルの絵本を約450冊出版してきている。5人の編集者を率いるのが、創業者で編集長のパトリツィア・ゼルビさんだ。

子どもたちの困難を

生きるための

おはなしに変える

イタリア・ミラノの絵本出版社、
カルトゥージアの実践

生きづらさを抱える子どもたちに寄り添い、声を聞き、絵本のかたちに昇華させる、ユニークな出版社がイタリアにある。ミラノに小さなオフィスを構えるカルトゥージア出版だ。小児がん、発達障害、親の離婚など、困難に直面する子どもたちが、問題に向き合い、壁を乗り越えていくことを助けるために、専門家の力を借りながらさまざまな「おはなし」を創作してきた。その実践とは？

文=末澤寧史 協力・写真提供=どく社 取材協力=多木陽介



カルトウージア出版の創業者で、編集長のパトリツィア・ゼルビさん。1987年、28歳で同社を立ち上げた

子どもたちの心に ポジティブな種を残す

作家、画家に加え、当事者の子どもとその家族、心理学者、ソーシャルワーカーなどが参加し、一緒に物語をつくっていく。「子どもの声を『聴く』ということを大事にしてきたんです。それも尋問みたいでなく、気楽

「デリケートなテーマであるほど、優れた書き手や画家の手を借りる必要がある」とパトリツィアさんは言う。物語のリアリティとクオリティを追求するために採り入れているのが、フォーカス・グループというユニークなチーム制。チームには、編集者、



『しっぽをなくしたねこ』の紙面の一部。医療器具のメッシュの面が、勇敢なねこにとってなくてはならない“装備”になる。物語化されることで、現実から一步距離のあるねこの冒険の話として読める

活のなかで直面する葛藤をテーマとし、「ケアすることを目的として出版している」という。

たとえば、小児がんをテーマに2010年につくった『しっぽをなくしたねこ*1』。

しっぽをなくしてしまった失意のねこが主人公で、しっぽを探しに宇宙を旅する。空気のない宇宙に旅立つにあたってねこがかぶるのが、顔まで隠れるかっこいいメッシュのマスク。このマスクは、子どもが放射線治療を受ける際に、頭が動かないように固定するためのメッシュ状に穴のあいた面がモデルとなっている。その面をつけることを嫌がり、全身麻酔をせざるを得なくなる子どもが少なくないことから、「おはなしの力で、子どもたちの気持ちをほぐせないだろうか」と医療機関から制作の依頼を受けたのだという。

物語の最後は、ねこが勇敢さをトラから讃えられ、しっぽをもらうという展開となっている。この物語を読むと、メッシュの面が“怖いもの”から“憧れの装備”に変わるそうだ。物語が目の前の現実のとらえ方をさりげなく教えてくれるのだろう。



*1『しっぽをなくしたねこ』（企画：ガブリエレ・カラベッリ、サラ・フラスカ 作：エマヌエラ・ナーヴァ 絵：アンナリーザ・ベゲッリ／未邦訳）

に、ね。小さくても、大きくても、子どもには話をちゃんと聞ける大人の存在が必要なんです」

制作の依頼は、社会福祉関係の財団などから持ちかけられる。完成までに、1時間半〜2時間のディスカッションの場が4回ほど設けられるという。

初回は、編集者のパトリツィアさんが、心理学者、ソーシャルワーカーなどの専門家とともに、子どもたちやその家族から経験の聞き取りを行い、レポートにまとめる。

次にテキストを担当する作家も聞き取りに加わる。作家は聞き役に徹し、取り上げるテーマに関するエッセンスが出揃ったところで、動物を主人公にする、昔話仕立てにするなど、メタファーとしてストーリーをまとめていく。

そして、テキスト案が出来上がると、協力してくれる学校で読み聞かせを行う。その際、子どもたちにとってどんな場面が印象に残ったかを知る



絵本『きみといっしょにとぶ』（作：サビーナ・コッロレード／未邦訳）制作のためのフォーカス・グループに参加したメンバー写真提供：カルトウージア出版

LIBRI DI CARTHUSIA EDIZIONI

カルトゥージア出版の絵本



しかくいおはなし

さまざまな生きづらさを抱える子どもたちが、生活のなかで直面する問題をテーマとし、ケアすることを目的として出版している。フォーカス・グループという当事者や心理学の専門家などを交えたユニークなチームを編成する制作スタイル。



タラリタラレラ

エマヌエラ・ブッソラーティ作。架空の言語「ピリブ語」を話すおさるのピリプー家のおはなし。2010年にイタリア「アンデルセン賞」のベストブックに選ばれ、7万部のベストセラー。谷川俊太郎訳で、日本版も集英社から出版されている。



国境なきおはなし

モロッコ、ロシア、カンボジア……。蛇腹折で、さまざまな国のおはなしをまとめたイタリア語と現地語のバイリンガル絵本。移民の多いイタリアの子どもたちが異文化に触れると同時に、移民の親子がイタリア語を学ぶ機会もつくる。



サイレントブック

言葉の壁を越えて読める、テキストのない絵本。カルトゥージア出版はポローニャ・ブックフェアでコンテストも主催し、多数のサイレントブックを出版している。イタリアでは、難民の子どもたちの支援にも活用されてきた。



ために、文章や絵でフィードバックを得る。最後に、画風の合う画家に参加を依頼し、経緯を共有して完成に向け進めていく。

このようなプロセスを経ることで、つくり手は「子どもの生活、経験を絵本に取り込むことができる」という。一方、参加する子どもたちも、完成までプロジェクトの一員として創作に関わる。このプロセスによって、「子どもたちにとっても『自分の絵本』になり、ポジティブな種を心に残すことができる」とパトリツィアさんは語る。

作品は、着手から半年後には完成させる。出来上がった絵本は書店でも販売され、ロングセラーになっているものも少なくないそうだ。

「しかくいおはなし」のシリーズは、自閉スペクトラム症の子どもが社会で生きる葛藤を題材とした物語や、思春期の子どもたちのアイデンティティの揺れを題材とした作品などさまざま。だが、すべての作品が、生きるなかで傷ついた子どもたちが、物語から希望を見出せる内容になっている。カルトゥージア出版は、ほかに、「サイレントブック」と呼ばれるテキストのない絵本や、



オフィスは、レオナルド・ダ・ヴィンチの《最後の晩餐》の壁画で知られる、サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会の裏通りにある

「国境なきおはなし」という各国の移民の昔話を多言語で紹介する蛇腹折のシリーズなどを刊行している。いずれも、社会的なテーマを扱うものが多いのが特徴的だ。サイレントブックについては、ジャンルの牽引役として、児童書の世界的な見本市であるポローニャ・ブックフェアでコンテストも主催している。

「たとえば、テキストがない絵本でも、物語は絶対に必要」と、パトリツィアさんは強調する。物語が、困難に直面する誰かの支えとなり、社会をしなやかに変えていく力となることを信じているのだ。



壁に貼られていた昔の写真

自分の身体で演じなおす

演じることは身体を通して、経験を語りなおすこと。問題児とされる子どもたちと、映画監督や撮影関係者との丁寧な協働から生み出された作品に宿る演技の力が、私たちに伝えるものとは？



北フランスを舞台に、演技未経験の問題児たち自身が主人公を演じた映画。役者の選定にあたっては、キャスティングディレクターや演技コーチとしての経歴をもつ監督らが、北フランスの学校、児童養護施設、地域センター、青少年更生施設などを1年かけてめぐり、公開オーディションを実施したという。第75回カンヌ国際映画祭(2022年)「ある視点」部門でグランプリを受賞。

リーズ・アコカ、ロマーヌ・ゲレ『最悪な子どもたち』(2023年公開/100分)

他者が抱える障害や困難を症状として記録するのではなく、その人の目の前にある風景をなぞってみる。美術家の飯山由貴さんと妹の千夏さんが真夜中の住宅街を歩む軌跡に、その術が表れる。

pp.12-17で詳述する「この病気にならないと理解できないと思います。どうせ、他人事でございましょう」展の展示設計・企画アドバイザーを務めた飯山由貴さんが、精神障害のある妹の千夏さんと制作した映像作品。本作で飯山さんは「本当の家を探しに行く」とつぶやいて家を出ようとする妹を、無理に家に閉じ込めるのではなく、2人で頭に小型カメラを装着して、一緒に近所の住宅街を歩いた過程をおさめている。



飯山由貴『あなたの本当の家を探しに行く』(2013年発表/33分)

2022年、東京都人権プラザで開催された飯山由貴さんの「あなたの本当の家を探しに行く」展。そのなかで企画された飯山さんのインタビュー映像がYouTubeに公開されている(2024年2月26日現在)。本作品をより深く知るための参考に



参考: 公財・東京都人権啓発センター YouTubeチャンネル「飯山由貴インタビュー」東京都人権プラザ企画展 飯山由貴「あなたの本当の家を探しに行く」アーティスト・インタビュー動画

他者の見ている風景をなぞる

ともに語りなおすための術

さまざまな感覚や特性をもつ人たち、そしてそれぞれの困難と向き合う人たちの声に耳を傾け、ともに語りなおすためにはどうしたらいいのだろうか。その術を模索し実践する、4分野の作品を手がかりに探してみたい。

聞くことに身を委ねる

まずは他者の声に耳を傾けることから。そう思ったなら、50年以上にわたって、各地の民話をその身ひとつで訪ね歩いた小野和子さんの著書をひらいてみよう。



小野和子さんが1969年から、東北の村々をひとり訪ね歩いた民話採訪の記録。小野さんが手製本で制作した40冊の「民話採訪ノート」から8話をまとめたものを受け取った清水チナツさんが「本にしたい」と申し出たことから書籍化がはじまった。

小野和子『あいたくてきたくて旅にでる』(PUMPKQUAKES, 2019年)



想いや言葉を重ねる

「普通」にできないことに付き合いながら、生きていくにはどうしたらいいのか。互いの困難との付き合い方に学び、想いや言葉を重ね合う高校生2人の物語を見届けたい。



勉強もバイトも続かないヤンキーの小林大和と、変わり者の転校生・宇野啓介。正反対の2人が「普通」にできないことに悩み、壁にぶつかりながらも奮闘する。アフタヌーンWeb増刊「&sofa」にて連載中。

泥ノ田犬彦『君と宇宙を歩くために(1)』(アフタヌーンKC, 2023年)

*1 「わたしの幻聴幻覚」プロジェクト 2019年、TNEによってスタート。統合失調症の主な症状である幻聴幻覚の表現に関わる取り組みを重ねながら、精神障害のある人たちの言葉と出会い、幻聴幻覚について知る、「他人事にしない」社会にしていけるための活動

「この病気にならないと理解できないと思います。どうせ、他人事でございましょう」展（以下、他人事展）の概要が記載されたハンドアウトを受け

下駄箱に靴をしまい、2階へと上がる。受付で「この病気にならないと理解できないと思います。どうせ、他人事でございましょう」展（以下、他人事展）の概要が記載されたハンドアウトを受け

「この病気にならないと理解できないと思います。どうせ、他人事でございましょう」

「ともに生きる」対話から生まれるもの

*2 「この病気にならないと理解できないと思います。どうせ、他人事でございましょう」展 「わたしの幻聴幻覚」プロジェクトの途中経過を伝えるべく、2023年7月13日～30日の期間、〈シアターねこ〉にて開催された展覧会。美術家の飯山由貴さんが展示設計・企画アドバイザーを務め、展示構成やプロジェクトのプロセスを記録した映像の編集などを手がけた。会期中にはゲストを交えた4回のギャラリートークと、「共に生きる社会ってなに？～表現やアートができること」と題したシンポジウムを開催



もともと幼稚園だった〈和光会館〉は、現在、コミュニティセンターとしてホールや会議室の貸出を行っている。その一部に〈シアターねこ〉があり、地域にひらかれたワークショップや展覧会、地元劇団の演劇公演なども企画・開催している



ともに笑い、怒り、語るために

「わたしの幻聴幻覚」プロジェクト

異なる他者の感覚に表現を通して向き合い、対話を生み出す。そんな実践が、愛媛・松山のNPO法人シアターネットワークえひめで行われている。精神障害のある利用者同士がそれぞれの抱える幻聴幻覚について聞き取りとスケッチを行い、カードや演劇の台本を制作し、制作物を用いたワークショップを通して共有するというものだ。2023年7月に開催された本プロジェクトの展覧会を振り返りながら、「聞く、語る、語りなおす」ことを考えてみたい。

文=永江大 (MUESUM) 写真=善家宏明

写真手前の展示台には、利用者が中心となって聞き取りと制作を行った《幻聴幻覚カード原画》(2019～2023年)。壁面には、カードを用いたワークショップから生まれた《幻聴幻覚台本》(2022年)、ワークショップの記録映像を飯山由貴さんが編集した40分ほどのドキュメンタリー映像(2023年)が並ぶ。階段状の客席スペースでは、設置されたモニターで、飯山由貴さんの映像作品《海の観音さまに会いに行く》(2014年)など3つの映像作品を観ることができ



2019～2023年に制作された《幻聴幻覚カード原画》。ネガティブな情景だけでなく、その人にとって生きる支えになるようなものも描かれている 作画：tawa

取ると、会場であるシアターへ。舞台側には「わたしの幻聴幻覚」プロジェクトを通して制作した作品群とワークショップのプロセスを伝える映像。客席側には本展の展示設計・企画アドバイザーを務めた美術家の飯山由貴さんによる映像作品が展示されている。
プロジェクトのスタートは2019年。東京・世田谷区の福祉事業所「ハーモニー」制作の『幻聴妄想かるた』と出会い、自分たちも同じ取り組みに挑戦したいと電話で問い合わせたことがきっかけだった。同年8月から〈風のねこ〉で幻聴幻覚カードをつくるための聞き取りがはじまり、カードづくりと並行して2020年には、「障害のある人との表現を考えるラボ」を立ち上げ、俳優であ

しているかなど、1回につき2時間ほどかけて細部を聞き取りしていったという。2022年からは外部の美術家が入り、4コマ漫画も制作することに。森本さんは「聞き取りをしている間も、幻聴幻覚に命令されている利用者の方がいるので、『目の前にいらっしやるんですね。こんにちはー』『どんな幻聴さんですか?』『色は?』など、対話しながらその場で絵を描いています。だんだんと利用者さん同士の関係性も育っていった。絵の表現が豊かになっていったように感じます」と実感を語る。

幻聴幻覚カードを用いて、2022年に制作したのが《幻聴幻覚台本》だ。ワークショップの参加者同士で配役を変えながら、それぞれがセリフに込められた感情や意図を想像し、発話していく。このとき、アドバイザーとして携わっていた飯山さんは、報告書のなかで次のように書いている。「他者によって自分の幻聴幻覚のエピソードが演じられる様子を、幻聴幻覚を経験した本人も参加して見聞きし、肯定的に考え

り演出家・劇作家の有門正太郎さん(ありかどしやうたろう)を招き利用者とともにワークショップを実施。その後は有門さんに加え、Edwin Satokoさん(えだん さとこ)、齊藤かおるさんといったアーティストが合流。現在も、関わる人の幅をさらに広げ、幻聴幻覚の世界を知るための演劇的手法を取り入れるなど、ワークショップのかたちも変わりつつある。
TNE代表の森本しげみさんは当時を振り返りながら「最初はアーティストも利用者も不安だらけ。でも、回数を重ねるなかで、お互いのことを知り、対話する状況が生まれていった」と話す。

「話せる」場があるということ

当初、聞き取りと作画は、〈風のねこ〉の利用者同士で行っていた。幻聴幻覚のある人となない人がおり、幻聴幻覚がある人のなかでもそれぞれ頻度や内容は異なる。ヒアリング相手にスケッチを見せながら、姿形や色、どんな音や声を



「アーティストの飯山さんとはいつか一緒に話たくて、2022年に本プロジェクトのアドバイザーとしてお声かけしたのがきっかけ。本展ではディレクターとして一緒に展示を立ち上げました」と森本さん

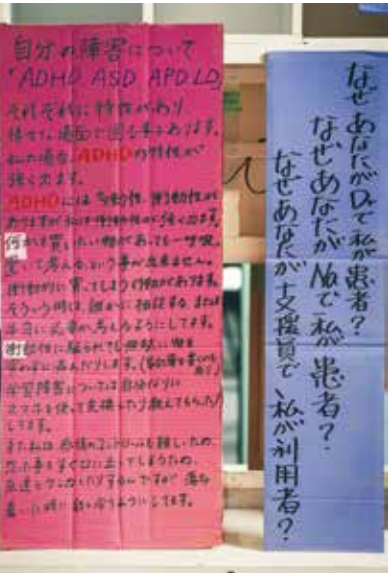
ている様子が印象的だった。個人が経験し、恐ろしかったり優しかったりする幻聴や幻覚の経験が、ある小さな集団の物語へと変化していく時間だった」
幻聴幻覚カードを制作するきっかけにもなった『幻聴妄想かるた』を知るまでは、幻聴



左の《幻聴幻覚台本》を使った演劇ワークショップの様子。参加者の近況や雑談から毎回スタートする 画像提供：「わたしの幻聴幻覚」プロジェクト

たこ入道さん

語り
はじめ惑星1
はじめ惑星2
はじめ惑星3
はじめ惑星2
はじめ惑星3
はじめ惑星2
はじめ惑星3
はじめ惑星3
Y子
語り
ここは宇宙のどこか。いろいろな惑星があるようです(原文ママ)。私をいじめに来る惑星もいます。私はいじめの惑星にひたすらことを言われて体調が悪くなることがあります。のの字を書けのの字を書けのの字を書けそうじゃな。そのの字ではな。こやうって角をくつきり書くんだ。もう相手に、もう相手にしたくないんです。白くて丸い円盤がやってきました。私がいじめられている時にできてくれる幻聴さんがいます。



「なぜあなたが支援員で私が利用者?」「(前略)感情のコントロールも難しいため、思った事をすぐ口に出してしまうため、友達とケンカしたりするんですが、落ち着いた時に話し合うようにしています。」

言葉や感情を重ねる

シアターに併設された楽屋には、市内の精神疾患・精神障害のある人が通う4施設の利用者と飯山さんのワークショップ「これなんでも思っていることを書いていいカードです」を経て生まれた作品たち——さまざまな言葉が描かれたボードが置かれている。社会運動において掲げられるプラカードのように、色も字体も大きささも、表れている主張も多様だ。そこには幻聴幻覚とはほぼ関係なく、個人の等身大の悩み、あき

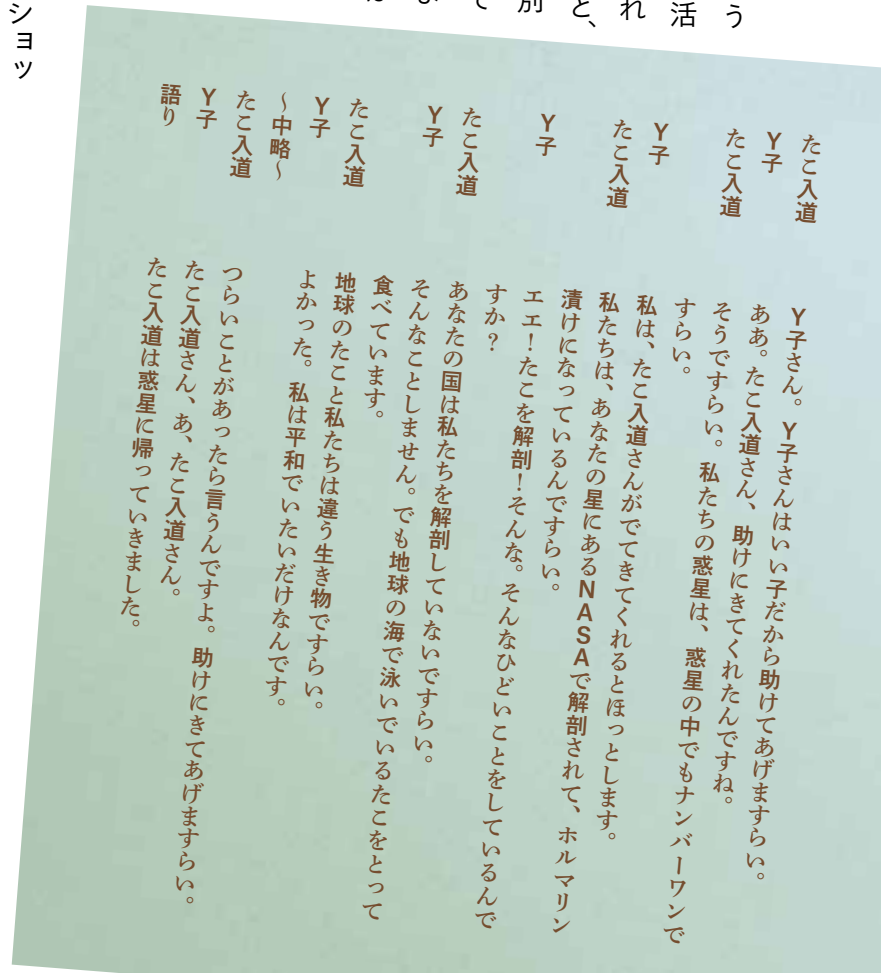


有門さんによるワークショップの様子(2022年3月)。「自分の身体の声を聞く」というテーマで顔のストレッチを行う。各々「目の調子はどうですか」と身体に問いかけ、向き合う時間をつくった
画像提供:「わたしの幻聴幻覚」プロジェクト

幻覚を広く伝えることに躊躇があったという森本さん。医療機関や精神保健の現場で活動する人ならば当たり前のこともかもしれないが、幻聴幻覚を共有すればするほど、統合失調症や精神障害のある人たちを特別な人の枠に分類し、追いやることになってしまう。しかし、《幻聴幻覚台本》にあるようなユニークな話を聞くにつれ、「これは(幻聴幻覚を抱える人たちの経験を共有するための)フックにするしかない」とあらためて考えた。

「台本をみんなで聞き合って、ともに場をつくっていくようなワークショップ空間のなかでは、幻聴幻覚のある・なしや、講師・参加者といった枠は気にならなくなつて、みんな一緒なんやなあという感覚があります。そういう場があつて、医療機関や家族にさえ

言うのものはばかられるような、自分のなかに閉ざしていたものを「話せる」ということが、まずは大きな一歩なんです。それによって症状が変わることはないんですが、幻聴幻覚を自分から引き離して考えられるようになった、というのはあ



「利用者の方は、朝になると自分の描いたものをみんな見にくるんですよ。こうやってじーっと見てると、『距離ができてくるんかなあ……うん。見てもらえて、いい』って」と森本さん

らめ、感謝、怒りなどの感情がちりばめられている。書いた人たちの息づかいや生活の雰囲気を感じられ、それらは筆者にとつても、自分の暮らしや感情と重なる部分がある。異なる感覚や身体をもつ人と人との関わりのおかげで、他者を本当の意味で理解することはできないが、だからこそその重なりを実感できる場はとても貴重だ。目の前にいる人の表現や言葉を聞き、自分が何者かを語ることに、そのなかで重なり合う「何か」を語りなおすプロセスにこそ、すでに同じ地面の上にとともにあるということを知る術があるのではないだろうか。



「いつも私たちを陰日向と支えてくださってありがとうございます」「私は小さい頃から『型』にはめられることが嫌いでした。自分のペースを乱されることが何よりも苦痛です。」。展示を見に来たほかの施設利用者が「私も書きたい」と、いくつか追加になった言葉もあるという

Cultivating The Arts

“生きるための技術”をさがして

第2回 北海道

創作を生きる力に



今号の案内人

大友恵理

社会福祉法人ゆうゆう
芸術文化推進室、学芸員

障害のある人の芸術文化活動の推進に従事し、展覧会やイベント、研修の企画運営などに携わる。

「THE ARTS」を“生きるための技術”にとらえ、表現が生まれる全国各地の現場をめぐる本企画。福祉や創作活動に携わる案内人とともに、“表す”行為やその過程を見つめてみましょう。第2回は、北海道で障害のある人の豊かな創造性と表現の活動を見つめ続ける、社会福祉法人ゆうゆうの大友恵理さんを迎えます。

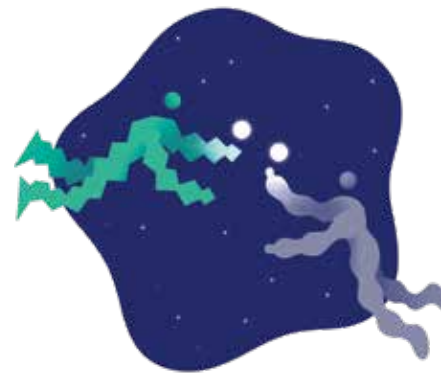
文=末澤寧史 写真=澤木亮平

私たちは全然違うけれど、少しずつ似ているし、変わることができる

飯山由貴 美術家

人と出会ったとき、「この人と私は違う人なんだな」と反射的に感じることもある。たとえば、名前の異なり、使う言語、装いの選択、移動の方法やその速度の違い、疲れやすさ。しかし大抵、(通訳者や翻訳手段を伴い)話したり、何か飲んだり食べたりと時間を過ごすうち、この人と自分は似たような生活の課題や問題意識をもつのだと気づき、親しみ、先をゆく先輩のように感じることもあったりして、「違う」と感じた心身はほぐされていく。「違う」と心身が感じることには緊張でもあるし、知ることでもある。最初に「違い」を感じなかった、自分と同質的なはずの人と話すと、「違い」を感じ、ゆがんだ笑いをつくって、この時間が早く終わってほしいと思うこともある。偏見はどこまでも自分勝手だ。作品を通して、人と知り合い話すことは、傷つきと回復が常に裏表にある。協力者にとっても、そんな機会であつたらいい。

かから話を聞き、それを何らかの方法で記録し展示することによって「さまざまな人々による一時的かつ持続的な小さな共同体—親密圏」がともにつくられることを望んでいるのかもしれない。そして、そのために、すでにある共同体に寄留させてもらっているのかもしれない。誰かの声を聞き、それを伝える方法とその言葉を選ぶことは、優しいようにできて、力そのもの、政治そのものでもある。このような関係の共同体は、なんらかのマイノリティ性がある表現を社会に現すときに、その表現を複数の視点から検討し、万が一、外からの攻撃があつたと



飯山由貴(いいやま・ゆき)

美術家。社会的なステイクマがつられる過程と、その経験が語り、つくりなおされることの痛みと回復に関心をもち、近年は市民や支援者、アーティスト、専門家と協力し制作する。

きに支え合える可能性をもっている。異なる人々同士が集い話すためには、権利や尊厳をさまざまな方法で回復することが必要な場合もある。それにかかる時間は、その人の人生の時間だけでは済まないこともあるだろう。それでも、それぞれの面白さとしんどさと面倒臭さを持ち寄り、聞き話し、またそれを誰かに話しなすこと、あるいは話したモヤモヤを誰かに適切に注意されることによって、私たちは自分のなかにはそれまでになかった言葉や態度を知る。それはキラキラしていないかもしれない。私たちが身につけた身ぶりを一度捨て、学びなおす痛みを伴うかもしれない。けれども、そうした小さくて不可逆な、私自身を変えていく身ぶりの積み重ねが創造的でないわけではない。それらの会話はきつと、誰のことも排除しない文化をこの社会に育む種だ。

DA特集、どうでした？

「読むこと」は、創造的な行為。一人ひとりにさまざまな読み方があるはず。巻末のアンケートはもちろん、SNSでも「#DA特集どうでした？」で、ぜひ感想を聞かせてください。

Webメディア「DIVERSITY IN THE ARTS TODAY」では、アーティスト・瀬尾夏美さんによる感想レビュー記事も紹介しています！



田湯加那子(たゆ・かなこ)

1983年生まれ。白老町在住。小学4年生の頃、家族で訪れた東京ディズニーランドの思い出を大きな絵にしたことをきっかけに、身近な人物や好きなものを絵で表現するようになる



と、スケッチブックを入れ替え、同じように模様をリズムカルに刻む。田湯さんが絵を描きはじめてのは、小学4年生の頃。アイドル歌手やアニメキャラクターなど、「自分の好き」を力強く、リズムカルなタッチで描いてきた。2005年の初個展以降、作品は高く評価され、2022〜2023年にはスイスのローザンヌで開かれた「アール・ブリュットとマンガ」展にも参加している。田湯さんはほぼ毎日絵と向き合う。ただ、それは本人にとって「作品づくり」ではないという。「生活の一部、加那子なりの普通を生きる術」と、側で伴走してきた母のひろみさんは表現する。

積み上げてきたスケッチブックは、100冊以上。花や野菜など具体物をモチーフに、完結した絵を描く時期もあったが、近年は作風が抽象的に、「完成」のないかたちに。以前に描いた絵を黒く塗りつぶしたり、写真集やカタログに絵を描いたりすることもある。「描く感触そのものを楽しんでいくのです。それを作品と呼んでいいのかわからない、迷いもありました」とひろみさん。迷いながらも出品した黒塗りのスケッチブックが、2019年度の「Art to You」東北障がい者芸術全国公募展で



2024年1〜2月に NAKAHARA DENKI Free Information Gallery で開催された、田湯加那子展《きらめき》。作品の変遷が紹介された

さまざまな作品に触れるなかで、大友さんは、「作家は、創作を生きる力に変えている」と感じているという。今号では、大友さんの案内で、そんな表現活動に取り組む人たちに会いに行く。

北海道で障害のある人の芸術活動を推進する「北海道アールブリュットネットワーク協議会」や、東北も含む広域支援センター「アールブリュット推進センター Gently」の事務局を担うのが、当別町にある社会福祉法人ゆうゆう。大友恵理さんは、その担当者として道内に住むさまざまな作家や支援者と連携してきた。「特に作家さんたちは、展覧会やイベントなどで作品を出してもらったり、作品紹介をしたりするなかで、関係性が築かれていきました」と大友さんは語る。現代美術のキュレーターだった大友さんは、2019年に北海道立帯広美術館で開催された「北海道のアール・ブリュット ころろとこころの交差点」展をきっかけに障害のある人のアートと関わるようになった。全道規模では初となる展覧会のディレクションを担当した。それから、ゆうゆうの職員として、アール・ブリュットの世界に深く分け入っていく。

溢れる「好き」、地域芸術祭の顔に

田湯加那子さん

新千歳空港から南西に車で約1時間。うっすら雪の積もった山間の高速道路を降りると、太平洋岸の白老町(しらおい)に入る。午後1時。海岸の住宅街にある、田湯加那子さんの自宅兼アトリエを訪ねた。

田湯さんは、居間の隣にある和室で、机に向かって絵を描いていた。「いつも9時〜17時のルーティンで描いているんですよ」と、大友さんが言う。机の上には、7、8冊のスケッチブックが積み上げられている。一番上のものに、田湯さんは、彫刻刀で彫るような筆圧で、色鉛筆をぐいぐいと押しあて、格子状の模様を絵に加えていく。数分経つ



ハンディキャップシアター Show Time
(ハンディキャップシアター・ショー・タイム)

写真左から藤田章太郎さん、三好宏樹さん、小澤育さん。3人をキャストに、2019年に旗揚げされた。明るく、コミカルな舞台が持ち味で、会場を笑いの渦に巻き込む



大賞に。2023年には、白老で開催された地域文化の芸術祭「ルーツ&アーツしらおい」に参加。18年ぶりとなる地元での展示が実現し、花の絵がメインビジュアルに選ばれた。

ひろみさんは、一線の現代作家とともに同芸術祭に参加したことで、「そこから加那子の創作活動の状況はフェーズが変わった」と語る。加那子さんは、会期中、

夜中まで起きて机に向かっていたそうだ。「障害のあるなしではなく、今この地で表現し続けている作家として認めてくれたのは大きかった」とひろみさん。
田湯さんが、ひとりのアーティストとして羽ばたこうとしていた。

**伝えたい、夢をあきらめない
ハンディキャップシアター
Show Time**

午後4時半。札幌は、雪が降りはじめた。劇団「ハンディキャップシアター Show Time」がいつも仕事のあとに稽古をしている福祉事業所へチャレンジキャンパスさつぽろ(CCS)を訪ねた。

身振りを交え、生き生きとした抑揚で台本の読み合わせを行うのは、三好宏樹さん、小澤育さん、藤田章太郎さんの3人。この日は、演技指導を行う俳優の金

田一仁志さん、舞台の裏方を担う3人のご家族とともにあたたかく迎えてくれた。Show Timeの舞台は、「コミカルで楽しい。真面目だが、頑張るほど空回りしてしまう三好さん扮する「唐間割宏樹」と、小澤さん扮するお茶目な「ミツフィー小澤」、藤田さん扮するマイペースな「日真田章太郎」が登場。話題をリードしようとする唐間割だが、2人はどどん脱線し——というドタバタ劇が笑いを誘う。

「小学生のときから、俳優になるのが夢でした」と、リーダーの三好さんはまっ



生き生きとした表情で台本を読む小澤さん。「練習はよくサがる」とおどける

すぐな眼差しで言う。Show Timeは、2018年にはじまった三好さんと小澤さんのコンビの活動に、2019年から藤田さんが加わるかたちで旗揚げされた。小澤さんの「私も大学に行きたい！」という声をきっかけに、高校卒業後の学びの場として、小澤さんや三好さんのご家族や支援者が2011年に立ち上げたのがCCSだ。小澤さんの卒業後、CCSは演劇プログラムを取り入れた。そのプログラムで、講師を引き受けてきたのが、市民劇団を率い、大学でも教えてきた金田一さん。演じることで、学生たちは驚くほど躍動していく。CCS



脚本・演出は、道内のテレビ番組でも活躍する俳優の金田一仁志さんが担当している。稽古の様子を見せてくれた



「自己実現に向かっているところがよくて、やりたいことをあきらめない姿が希望」と、大友さん。10月の定期公演に向けて、一座は新作の準備を進めている。

「舞台上立つと、仲間が応援に来てくれるのが嬉しい」と、小澤さん。藤田さんは、「楽しい舞台でお客さんを笑わせた」。三好さんは、「大好きな演劇を長く続けたい」と夢を語る。

にも負けない。「基本に立ち返らされましたよ」と、金田一さん。Show Timeの個性を引き出す脚本・演出家として、3人の役者の成長を見守り続けている。

「舞台に立つと、仲間が応援に来てくれるのが嬉しい」と、小澤さん。藤田さんは、「楽しい舞台でお客さんを笑わせた」。三好さんは、「大好きな演劇を長く続けたい」と夢を語る。

を卒業しても活動を続けていくかたちを模索するなかで、演劇未経験ながらも手を挙げた3人がSOME TIMEを結成した。「人に伝えることは、本当に難しい」と金田一さんは言う。3人には、演劇の基本である発声や表現法を何度も伝えてきた。

憧れ、思い出を、 何度も何度もかたちに 高丸誠さん

2日目は、あいにくの大雪。道南に向かう高速道路は通行止めとなり、札幌から下道で目的地の新ひだか町に向かう。予定より2時間遅れ、午後2時頃に社会福祉法人静内ペテカリが運営する支援施設へ静内桜風園へ到着。作家の高丸誠さんが、ふだん暮らしている居室の前で出迎えてくれた。



画像提供：
社会福祉法人ゆうゆう

高丸さんは、1988年から桜風園で暮らし、1998年頃から自室でメガネをつくっている。手本は見ず、幼少期の記憶に頼り、同じものを何個もつくる。

自作のメガネを貸してくれた高丸さん。
黒の油性ペンで、色をつけている



高丸誠 (たかまる・まこと)

1970年生まれ。セロハンテープを素材としたメガネの作品などが多くの人を惹きつけ、さまざまな展覧会に参加。同じ作品を何個もつくることが特徴で、自室や実家で大切に保管している



ささやかで Vol.2 大切な闘争の 備忘録 ~イタリア・ミラノから~

写真・文=和田夏実

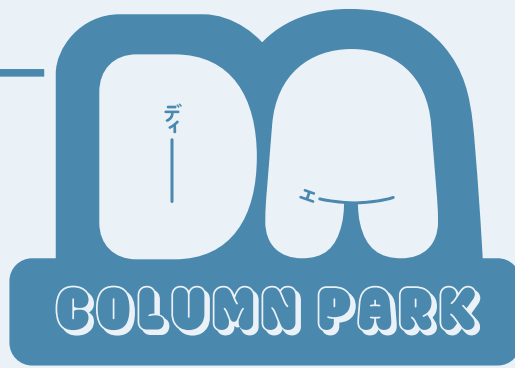
ささやかな闘争、自ら世界を形づくること。2023年8月半ば、私はイタリアに移住した。言語もわからない街で、身体の隅々まで日本での生活や文化、友人との会話、口癖が染み込んだ「私」のぐらぐらとした日常がはじまった。

いつの間にかサマータイムも終わり、日本時間の16時に、こちらは7時。朝がはじまる。イタリア語で明日を表す domani はラテン語の *dē māne* を語源に持ち、朝早く、明けを指す。日本の明日もまた、あけしだ（明時）、夜が明けるときに由来し、英語の tomorrow もまた to morgenne、朝に向かってを意味する。日々やってくる朝の美しさはどこにいても変わらず、そして歴史をたどっても、同じ美しさを想い、明日を迎えていたことに少し嬉しくなる。

イタリア語を学びはじめて驚いたのが、形容詞と名詞の語順だ。日本語や英語では形容詞＋名詞の語順で、「小さな」 「箱」と名詞が出てきてはじめて、「小さな箱」のイメージが頭に浮かぶ。一方、名詞＋形容詞の語順となるイタリア語では、「箱」「小さい」となり、一度、頭に浮かんだ箱のイメージが小さくなる。頭のなかでその形や見た目、色が変わるのだ。そのせいか、思いもよらないような形、遊び心に溢れたイタリアの家具に多く遭遇すると、「さては、頭のなかでいつも形を変えているからだな？」と思う。

和田夏実(わだ・なつみ)

1993年生まれ。インタープリター/リサーチャー。ろう者の両親のもとで手話を第一言語として育ち、さまざまな身体性の方々と協働した視覚身体言語の研究やメディア制作などを行う。



11/14

NPO福祉法人ザンザーラ

ローマ在住の多木陽介さんによる研修ツアーに参加し、念願の(ザンザーラ)へ。皆が対等に関わり合いながら商品をつくる。私がつくったもの、という感覚を一人ひとりがもつようなプロセス。今探索している「sense of home」「sense of belonging」に接続すると思いつきながら話を聞いた。sense of belonging に、一人ひとりの誕生日が書かれたカレンダーをつくる、という例がある。大きなイノベーションではない、けれども大切な美学を感じる。



11/28

化粧品売り場

リップクリームを探しに、街へ。ファンデーションの種類が多さに目を惹かれた。幼少期、自分の言語(手話)や家族との関わりを描くお話がないことで、世界に居場所がないような気持ちになったことを思い出す。一人ひとりの美の探求と肯定。ものがあるということは、それを使う人の存在を常に肯定することでもある。私のためのも。あなたのためのも。つくるといふことは、もう少しシンプルなことなのかもしれない。



備忘録の全文は
Webにて!



記憶のみを頼りに、ディテールを描き込む。台紙は切り貼りしたものを重ねている

「メガネはお父さんがかけていて、『大人』を象徴するものだったのではないかと、管理者の福田簡正(ひつよし)さんが説明する。『同じ作品をたくさん持つことで、何よりも自分を満足させている。自分のためにつくったものが広がっているんだと思います』

メガネのほかにも、高丸さんは、子どもの頃に見た車の絵、思い出の写真を模写したものをたくさんつくってきた。

「高丸さんの大ファンなんです」と語るのが、展示などを通じて高丸さんの作品を紹介してきた職員の櫻井真美さん。2002年から静内ベテカリで働き、「利用者さんが、暇つぶしにゆっくりしているものを集めるのが好きだった」。

アール・ブリュットの動向を学んだ櫻井さんは、2015年から地元で仲間と小さな展覧会をひらく

ように。高丸さんの作品も2016年に始めて展示した。

アートを介することで、福祉施設の利用者の「すごさ」に気づく。福祉の現場では「問題行動」とされがちなこと、別の光を当てることもできるという。

「高丸さんは、つくることで、人とつながりたいのかも」と、櫻井さん。展示も回数をこなすことで、作品を貸したり、取材に応じたりと、交流が生まれていく。そして、関係性が外にひらかれていくのは、自分たち支援者も同じだと感じている。

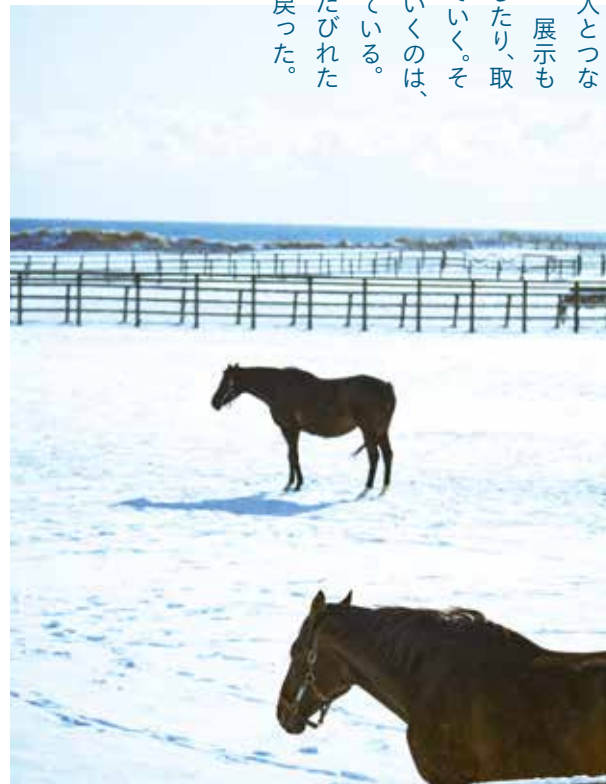
取材が終わると、ちよつとくたびれたのか、高丸さんは遅めの昼寝に戻った。



道内でも、アール・ブリュットの取り組みは、30年以上の歴史がある。多様な表現の可能性がある。

「日常生活のなかにあるものなので、まだ知らない作家さんはたくさんいるはず」と、大友さんは言う。

車は空港に向かう。車窓には、真っ白い雪原がずっと広がっている。好き、夢、憧れ——生きる力を生み出し、生を豊かにするどんな心のうちの表現が、そこにあるのだろうか。



田中みゆきの

きまぐれ 介護日記

キュレーターの田中みゆきさんが、
2023年春、介護の資格を取得し、
福祉施設に勤めはじめた。新たな現場に
身を置く彼女の日記をのぞいてみよう。

2023年6月某日
リズムに乗るように食べる

ケアが必要な人に対して行政が福祉サービスを決めてしまっていた「措置」の時代から、介護保険を機に必要な人が自分でサービスを選ぶ「契約」の時代になり、福祉の世界では「自己決定」が重要だと教わる。では、たとえばある人の食事の介助をするときに、毎回食べたいものを聞くべきだろうか。もちろんそうする必要や要望がある場合はそれがいいと思うが、大抵の人の場合、そんなことを聞かれてもよくわからないだろうし、答えるのも面倒だ。多くの人がいちいち考えずに自然とやっていることを、自然とできるようにする介助があるべきだなとも思う。

上手くいっていいような職員さんの食事介助を観察してみる。すると、大事な何を食べてもらおうかというより、その人が食べやすいリズムをつくることだとわかる。わたしなんか介助すると1時間以上かかってしまった食

事を、彼女たちは半分以下の時間で終わらせる。かと言って急いで適当に食べさせているというわけではない。一人ひとりの食べるリズムを把握して、変な前置きや躊躇なく、良いタイミングで口に入れるのだ。まるで餅つきを見ているようだな、と思った。

介護ではそういったことがよく起こる。車椅子からトイレへの移乗だって、ベッドに寝るのだって、あるいは会話でさえも、介助する相手の体のリズムにすると入り込めば、それまで硬直状態にあったとしても、不思議と上手くいったりする。体を使うことを苦手としてきた自分にとって、他人の体をよく見てリズムを読み、それに合わせて体を添えることは、ダンスのレッスンのようでもある。

田中みゆき(たなか・みゆき)

キュレーター。「障害は世界を捉え直す視点」をテーマにカテゴリーにとらわれないプロジェクトを企画。表現の見方や捉え方を障害当事者を含む鑑賞者とともに再考する。ACCの助成を得て2022年ニューヨークに滞在。

福祉や表現の現場から届いた、
新たな挑戦にまつわる活動通信

〇〇はじめました

第2回

「ひよん」なことから

丹正和臣(ぬかアートディレクター)

1977年生まれ。生活介護事業所(ぬかつくるとこ)の立ち上げメンバーとして2013年より勤務し、コンセプトワーク、デザインワークを担当。2022年度始動の「なんぞそんなプロジェクト」の企画にも関わる。

発酵をテーマに事業をはじめ10年になる。利用者やスタッフ、個々の魅力が「ぬか漬」のようにつくりに発酵し、社会へと広がっていくことを願って「ぬか」という名前に想いをのせている。こう話すといかにも感じがするが(もちろんとても大切にしている考え方なのだが)、ただ「ぬか」という言葉の響きに惹かれたという切のよい「か」。いいじゃないか。言葉の意味から逸脱して「ぬか」という音を遊んでいくと、どんどん自由になれる。利用者を「ぬかびと」、来客を「まぜびと」、毎年のお祭りを「ぬかよろこび」、オリンピックのパロディとして「ヌカリンピック」など、ほかにも

たくさん……。ぬかはダジャレやユーモアが好きなのだ。そろそろ本題に移ろう。ぬかは、就労継続支援B型事業所(ひよん)をはじめていく。簡単に言うと働く場所だ。名前の由来は「ひよんなことから」の「ひよん」。たまたまを大切に、あらゆる境界を飛び越えるようなイメージを重ねている。仕事は「おむすびや味噌汁」の提供、「食品や本」の販売、「サウナ」などを予定しており、ゆくゆくはぬかびと一人ひとりに合わせた仕事づくりができないかと企んでいる。新聞ちぎりが好きな小池佑弥さんは、イベントでのワークショップが仕事になったこともある。好きなことや、その人らしさが働きにつながるための



(ひよん)内観。全国の福祉施設や生産者の商品を扱う

チャレンジをしてみたい。ひよんな出来事は思いもよらぬところからやってくる。「発酵」も「ひよん」も「待つ」ことが共通のテーマだと気がついた。美味しい漬物ができる「そのとき」を、言葉遊びでもしながら気長に待つてみよう。あなたも一緒にどうでしょう。

映画『フジヤマ コットントン』が できるまで

〜後編〜

富士山が見守る甲府盆地にある福祉事業所へみらいファーム。2023年秋、この場所の営みと人間模様を映すドキュメンタリー作品が完成。約1年の撮影期間を経て2024年2月より公開中の本作のプロセスを、監督・青柳拓、撮影・山野目光政、編集・辻井深の視点をつづる。

画像提供：ノンデライコ(配信)

2022年10月26日

玉ねぎをむく、おおもりさん

彼の状態が感じられて好きな画。おそらくなんらかの孤独を抱えてじっとしていたり、時折作業をしたり。そんな姿を側で見ながら、彼と僕が同じ年ということもあり、少しずつシンパシーを感じていった(山野目)



11月9日
撮影者の祈り

1年間を通しておおもりさんと関係性を築いてきた山野目くん。ほぼ最後、畑に佇むおおもりさんを撮ったこのカットには「祈り」のような想いがあったと思う。これまでの時間を映像として刻むような(青柳)



2023年1月2日

けんいちさんの妻参り

自分の弟は重度知的障害があるのだが、父が亡くなったとき、けんちゃんと同じように仏壇に手を合わせた。それを思い出して印象深い。けんちゃんの父親への強い想いが感じられるシーン(辻井)



1月11日
たつなりさん
からの質問

ロマンチストな、たつなりさんからの投げかけにハッとさせられる(山野目)

急に草刈りの手を止めて、思いついたように顔を上げ「仕事ってなんだと思う?」。この対話自体が、「一緒につくっている」感覚を感じさせてくれた。「一体お前は何を考えているのか?」と聞き合うこと。それは、人の存在を肯定することでもある(青柳)

答えは...



2月25日
編集作業



膨大な量の素材からOK素材を洗い出し、構成の大澤一生さんが全体を観ながらブラッシュアップ。僕は作品全体に神経が行き届くような詩、タイトルの案をとにかくたくさん書き出していた(青柳)

また来るね!

インクルーシブな プロダクト開発

機能に執着するあまり、誰が協力しても結局同じような答えになっちゃう難しさを感じていて。機能ももちろん大切。だけど、その奥にある使う人の気持ちや想いを汲み取って、形のアイデアを生み出せるといいと思うんだよね。
(山田) ▶00'11'32"

視力が悪い人の メガネ選びの話

メガネを買うとき、以前は鏡の前で試着していたんだけど、試着用メガネには度が入っていないから、ほぼ見えなくて(笑)。アプリでバーチャル試着ができるようになってから、メガネ選びが楽しくなった。
(浅野) ▶00'15'50"

スポーツ用具と
アイデンティティ

アフリカンヘア用のス
イミングキャップが大会
で承認されたニュースを
見て、髪型の表現そのも
のにアイデンティティが
ある国や文化がたくさん
あることに気づいたんだ
よね。その尊厳を守る意
味で重要なトピックだ
と。(山田) ▶00'18'27"



インクルーシブデザインにまつわる“あれこれ”を
ときに脱線しながらお話しするラジオコーナー。
本誌では、そのなかから印象的な言葉をご紹介します！

第2回テーマ 私らしさと向き合う

誰もが自分らしさを表現できる環境づくり
が求められている昨今。第2回ではファッ
ションやスポーツ、おもちゃなど、身近な
さまざまな物事を通して、私らしさとの向
き合い方についてお話ししていきます。

今回話題にあがった事例……bottom'all、SOLITI、Bethany
Williams、Will & Well、FABRIC TOKYO 渋谷MODI、ゆる
スポーツ、Learning Disability Super League、Multiform、
にぎやかサウンド 黒ひげ危機一発、グラマなど

ラジオへのアクセスは →
Webから！



パーソナリティー



山田小百合 (やまだ・さゆり)
NPO法人 Collable 代表理事
知的障害・自閉症の兄や弟と
育った経験から、インクルーシ
ブデザインに関心をもち、NPO
法人 Collable を設立。企業や
自治体と協働したプロジェクト
に多数関わる。



浅野翔 (あさの・かける)
デザイナーリサーチャー
名古屋を拠点に活動するデザ
インリサーチャー/サービスデ
ザイナー。デザイナーサーチ
による社会包摂の実現を理念に掲
げ、幅広いジャンルで一貫した
デザイン戦略に携わる。

敵味方の関係が 曖昧になるスポーツ

Studio Fontanaが2019年にはじめ
た「Multiform」は、体育やスポーツ
をいろんな問題や可能性を孕んだ
題材としてとらえたときに面白いな
と思った事例のひとつ。ゲームが
進行するにつれて、勝ち負けの線
引きや敵味方の関係が曖昧になっ
ていくルールやユニフォームデザ
インが面白い。(浅野) ▶00'31'46"



変形可能なユニフォームを用い
た新しいチームスポーツのプロ
ジェクト。開発には、オランダ
の哲学者やロッテルダムにある
小・中学校の体育教師・生徒ら
が関わっている

インクルーシブデザインを 実践する際の心構え

(デザイナーは)「上から目
線だ！」と感じさせてしま
わないためにも、どうい
う手続きを踏むのか、どん
な人たちの声を反映してい
るのかについて、より自覚的
である必要があるってことだ
よね。(浅野) ▶00'50'00"

ゲートボールに革命を起こした おじいちゃんの話

地域のゲートボールで下手な人が怒
鳴られたり、いじめられたりして部員
が減っていたとき、「これはまずい、
やり方を変えよう！」と思っ
たうちのおじいちゃんは、上手い人と下
手人を近づけるオリジナルルールを
つくったんだよね。(浅野) ▶00'23'39"

福祉の現場の文字採集

第2回



アートスペースからふるのアー
ティスト・福井将宏さんの専用カ
レンダーは、月に1度だけ、大活
躍する。それは、歯医者予約
を描きこむ日だ。画像は2022年
1月のカレンダー。右下に「歯医
者」の文字が記されていること
にお気づきだろうか(ちなみに、
この月の歯医者日は1月28日
[金]だった)。「スタッフも忘れ
ないでくれよな」と言わんばかり
に、鉛筆を持つ手に力がこもる。
どんどん伸びていく線は文字？
それともアート？ 来月も頑張る
のだという強い意志を感じる。

福井さんの歯医者予約

採集地 アートスペースからふる(鳥取)

採集者 伊奈真弓(いな・まゆみ)

一般社団法人アートスペースからふる副理事
長。サービス管理責任者として個別支援計画
作成を担当。現場から生まれるアートを商品
に展開する「商品部」の部長として、さまざ
まな商品企画・開発に携わる。

映画公開情報

『東京自転車節』で2020年の
緊急事態宣言下における都市
を描いた青柳拓監督の最新
作、『フジヤマコトントン』。
2024年2月10日(土)より、東
京・ボレボレ東中野を皮切りに、
全国の劇場で順次公開中。

『フジヤマコトントン』
Webサイト



フジヤマコトントン



最初に作品を見たのは、
施設職員と利用者さん、その
保護者の方も含めた関係
者全員。「いつもの(みらい
ファーム)じゃーん」とい
う感想をいただき、この場
所の「普通」がちゃんと撮
れたのだと思えた(青柳)

10月11日
試写会八ガキの送付

5月26日
関係者に向けた試写会

DIVERSITY IN THE ARTS PAPER

日本財団DIVERSITY IN THE ARTSが情報発信の一環として、Webメディア「DIVERSITY IN THE ARTS TODAY」とともに制作しているフリーペーパー『DIVERSITY IN THE ARTS PAPER』。2017年の創刊以来、表現活動を行う障害のある人たちのアート作品とそれを取り巻く文化を軸に、多様性の意義や価値を広く伝えてきました。『DIVERSITY IN THE ARTS PAPER』が担う役割は、媒体名の「THE ARTS」を「障害」を軽やかに乗り越えていく知恵・技術・表現」ととらえ、その実践者や活動を紹介・応援していくこと。社会と個人のあいだにある「障害」、個人と社会における「多様性」について、読者のみなさまとともに、さまざまな視点から考えるための媒体として、どうぞご愛読ください。



アンケートにぜひご協力ください！
 今号へのご感想・ご意見をお寄せください。
 抽選でプレゼントをお届けします。
 【回答締切：2024年4月21日（日）】

PAPER

バックナンバーのPDFはこちらへ



14号から
リニュアル！

TODAY(Web)



Webでも
情報発信中！



むかしむかしあるところに



むかしむかしあるところに



わたしわたしいまいるところ



わたしわたしいまいるところ

マンガ：makomo

幼い頃に親しんだ物語、歴史や事実を伝える証言、身のまわりの人との対話——誰しも、胸に響く「おはなし」と出合った経験があるのではないのでしょうか。聞く／語るという営みは、相手と自分を確かめ合う手ざわりを実感させてくれます。揺らぐ自分を差し出し、相手を信じることから紡がれていく「おはなし」。だから、苦難を歩き、希望を見出すために、私たちのそばにあり続けるものなのだと感じました。